

TOKIO:2.0

PILOT 探偵宣言

とほい空でびすとするが鳴る。
またびすとするが鳴る。
ああ私の探偵は玻璃の衣裳をきて、
こひびとの窓からしのびこむ、
——『殺人事件』萩原朔太郎

さっきお昼のカフェで話し
ろう下で見たレディは
かつらの色がガラリとちがう
こっそり開くパフにしこんだアンテナ
口紅から発信機の音
——『時のないホテル』松任谷由実

あのものうげな、夢二の絵みたいなカフェの女給といい、
そのヒモかなにからしいごろつきの「豊さん」といい、
ヒゲの巡査長やその部下のおまわりといい——
みんな、いかにもそれらしく、
そして、ほんのわずかそれらしすぎるのだ。
——『魔都』栗本薫

「私はロジャー・スミスを演じていいのだな？」
「演じる？ あなたは俳優などではないわ。『ロジャー・スミス』」
「その通りだ。『R・ドロシー・ウェインライト』。君がそう呼ぶ限り、私はロジャー・スミスなのだ！」
——『THE ビッグ・オー』

この街には、探偵が必要だ。

最初にそう言ったのは誰だっただろう。

早朝の道を飛ばしながら、彼はぼんやりと考えた。

誰の言葉であれ、そのことを疑うものはいるまい。つい今しがた、いつもなら通れる道を迂回してきた。昨日、『黄金魔人』ことマハラジャ・ギリリが銀行を襲った際の余波で高架道路の一部が崩れたためだ。

この街には、探偵が必要だ。

カーラジオが伝える早朝のニュースは、すでにいくつかの犯罪の発生を報らせてい

る。怪人（ヴィランズ）たちの暗躍は年々、増加の一途をたどっていた。『誘拐マイスター』『アンクル・オズが某企業の社長令嬢を誘拐した事件。』『死神の代理人』『デッドエンドの殺人予告。』『セレブ怪盗』紅姉妹による、美術品の盗難。そしてまだ犯人の特定されない、奇怪な事件——この街では毎日のように密室で死体が見つかり、嚴重に警備されていたはずの秘宝は忽然と消え、殺人の容疑者には全員にアリバイがある。

だからそれは、誰か特定個人の言葉ではなく、人々の総意——ユングの言う集合的無意識が言わしめたことであつたかもしれない。

この街には、探偵が必要だ。

この街……怪人たちによる謎と幻想に彩ら

れた犯罪の横行する街。それなのに、極東でもっとも栄え、豊かで、華やぎ、浮かれ騒ぐこと喧しい、東洋の魔都——その名を、トキオポリス。

朝焼けの空を背景に、《東京タワー》の威容があらわれる。未完成でありながら、この街を支配するかのようにそびえ、すべてを睥睨する巨大なバベルを横目に、彼は車を走らせ続けた。

一九九九年の、あの凄まじい戦争で、この街はすべてが瓦礫と焼け野原になった。

あの戦争が終わってからたったの十四年しか経っていない。

それなのに、この街はどうだ。

むろん、戦争の傷痕がまったくないとは言えない。

まさしくあの《東京タワー》も、戦争によ

って建造が中断し、打撃を受けた。本来ならとうに、当初の予定どおりあれは衛星軌道まで延び、静止衛星と接続されて、都市と宇宙とをつなぐ未来のポータルとなるはずだった。

この十四年間、《東京タワー》は戦争で受けたダメージを修復しつつ、再建が進められているというが、一向に完成する気配がない。サグラダファミリアとどちらが先にできるのか賭けをしているものもいるそうだ。

戦争からの復興を急がんとした東京政府は、壊滅した都市をいちど整地して建て直すということをせず、瓦礫と焦土のうえに、それを覆うような新たな都市の建造を行った。

トキオポリスは縦にいくつかの階層を重ねて築かれた積層型の都市であり、その腹の下には「旧東京市」をそのまま内包している。いわばそれは癒えないままなかったことにさ

れた傷痕だ。光が強まればそれだけ闇は濃くなるというけれど、トキオポリスがまさにそうであつた。美しい自然あふれる《禁苑》を中心に、高架鉄道《山手線》の輪に沿って展開する積層都市は、上層は都市の温暖化を回避するための緑化地区や人口河川がきらめき、中層は上層を支えるアトラスのごとき剛健な建物が立ち並ぶ鉄とコンクリートの森であり、アジア経済圏の中核として空前の繁栄を謳歌している。

その、文字通りの真下には、下層都市……トキオポリスの基盤に巻き込まれた「旧東京市」の残骸のなかに、違法な闇市や、バラックからなる貧民窟、放棄された汚染地域が広がっているのだつた。

だからこの街に犯罪が絶えないのも無理からぬことであつたらう。

この都市そのものが、その胎内に闇を育てていたのだつたから。

それがトキオポリスという街であり、この時代——「新昭和」の姿であつた。

『本郷区にて殺人事件発生。現場は密室とのこと。区内の各車は急行して下さい。住所は——』

入電をキャッチしてラジオは自動的に無線の傍受に切り替わつた。

必要な情報を聴き取り、記憶すると、彼はハンドルを切りつつアクセルをぐつと踏み込んだ。飛ばせば現場には7分で着く。

無線は現場が二重の密室であつたこと、凶器が見当たらないことなどを告げていた。

「出番だな」

われ知らず、彼はつぶやく。

そう。

この街には、探偵が必要だ。

1

「この街には、探偵が必要だ」

あの方はそう仰いました。

思えば、それが——まさにそのときが、わたくしの運命が決まった瞬間だったのではないでしょうか。

わたくしはあの方に言ったものでした。

「もう一度、お会いできますか？」

あの方はそつと微笑んでおいででしたが、なにもお答えになつては下さいませんでした。それでわたくしは、言いようもなく哀しくな

つてしまい、涙が零れてしまったのです。

「どうか、どうかもう一度……お会いしよう
ございます」

わたくしは言いました。

すると、あの方のてのひらがふうわりと、

わたくしの髪を撫でて下すつたのです。

「謎を——」

「え」

「謎を解きなさい。解き続けなさい。そうすればまたいつか、私に会えるだろう」

「それは、わたくしに、探偵になれるということですか？」

わたくしは問いました。でももうあの方は、それ以上はなにも仰いませんでした。

ですが、ほかにどのような意味がありましたよう。

この街には、探偵が必要なのですから。あ

の方がそう仰ったのですから。なにより、あの方こそ、探偵でいらつしやったのですから……。

「わたくし、探偵になります。きつとなります。お約束しますわ！」

わたくしはそう言いました。

叫んでいた、と言つてもいいでしょう。

去つてゆかれるあの方の背に向けて、そしてわたくし自身へそう宣言したのです。

誕生日の、朝でした。

わたくしが、十四歳になる日のはじまりです。

またあの方の夢を見ていたようでした。もう何度となく、繰り返した夢。

遠ざかつてゆく背広の色とソフト帽のかたち。あの方の低い声の調子と、わたくしの頭

を撫でて下すった手の大きさと温かさを、わたくしは事細かに憶えていますのに、それなのにその光景はどこかしら遠く、まぼろしのようによんやりとしている、そんな不思議な心持ちがします。

それはやはり夢だからで、記憶と言うにはあまりにわたくしが幼かったということなのでしょう。

実のところあの方のお顔さえ、仮に、木炭を渡され、カンバスに向かつて、さア、素描してご覧なさいと言われれば、困ってしまうのです。

ですけれども、もしも、今再びあのお方にお目通りしたならば、見紛うということは決してないでしょう。

たとい銀座の雑踏の中でも、その中にあの方がいらしたら、わたくしきつと一目で見つ

け出すことができます。

不思議なことねエ、と美津子さんなどは仰る。

でも、まりえさん。貴女のお話聞いていると、まるで殿方がファムファタルを語る時のようだワ。貴女ってスツカリその探偵紳士に魂を奪われておいでなのねエ。

そう言うってお笑いになったのですけれども、美津子さんの仰ることも尤もだったでしょう。ファムファタル、というのは仏蘭西語で「運命の女」という意味で、男性の運命を狂わせるほどの恋のお相手、いわば傾国ということでしょう。実際、わたくしの運命はあの方にお会いして変わった。

いえ、それとも、最初からそうある宿世のさだめであつたのかもしれませんが。

なににせよ、あの方と会い、あの方に約束

したため、わたくしは……

「！」

わたくしは、そこでハッと、目を覚まし、飛び起きました。

それまでは、目覚めてはおりましたけれど、ただぼんやりと、夢の余韻に浸りながら天蓋を見つめていたに過ぎません。けれどそのとき、わたくしは今日が新昭和十四年の、わたくしの誕生日であつたことをハッキリと意識に上せたのです。

今夜のために髪を波打たせたかったので、くせをつけるために髪を巻いてやすんでいました。その巻髪を解きもしないまま、わたくしはライティングデスクに寄りつき、誰も見ていないに決まっているのに、そつと周囲を確かめてから、ひきだしの中をあらためたのでした。

そこには、昨晚、しまったとおりに、洋書
簡があります。

わたくしは、思わず、手にとって胸に押し
当てました。ああ、これは夢ではなかった。
この手紙をお家で受け取ると、じいやお父様、
お母様に知られてしまいますから、わざわざ
局留めにして郵便局までうかがったのです。
誰にも見咎められることのないように郵便局
まで行ったその道中は、キネマで観た女スパ
イのような、わたくしにとっては今年いちば
んの大冒険でした。

胸の高鳴りと、泉のように沸きあがる喜び
を反芻したあと、わたくしは急いで顔を洗い、
身支度を整えると食堂へ向かいました。

お母様はすでに朝食の席に着いておいで
でした。

「おはようございます」

「おはよう」

「お父様はもうお出かけになったのですね」

「ええ」

じいがおたくしのグラスに果汁を注いでく
れました。

こんがりと焼かれた薄いトオストにバターを
塗っておりますと、ふいにお母様が仰います。
「まりえさん。アナタ、今夜のお支度はすつ
かりできておいででしょうネ」

「はい、お母様。ドレスはこの火曜に帝陽堂
の外商の方が届けて下さいましたわ。靴も先
週、お父様と代官山で揃えましたし」

「結局、仮装は灰かぶり姫だったのだわネ」

「ええ、そうです」

わたくしはちよつと辟易しました。

お母様——こんなことを言っては子どもじ
みた、よくないことですけれども、どうして

もわたくしは、父の後妻であるこの方を心の底からお母様とお呼びするのは障りがあるように思えてなりません。もちろんそんなことは決して口にしはいけないことですけれども。ともあれ、お母様は、ご自分の発案が通らなかったのをお恨みになっているのだと思います。

けれど致し方のないことでしょう。わたくしの誕生日のお祝いを、仮装の舞踏会にしてはと言つて下すつたのは、わたくしとしても愉快で大賛成なことでした。ですが、

「アナタは沐浴のヴィーナスに仮装あそばしてはどう？ 西の客間に羅馬風の壺があつたでしょう。あれを手にとって、こう、裳裾を垂らしてお歩きなさいな。髪は結うのがいいでしょうネ」

というのはあまりに破廉恥で、ただもう「ま

ア」と言つたぎり二の句が継げなくなつてしまいました。わたくしも、古くからこれはこういうもののだから、と決め付けられるよりは、新しいことを試みるのは好きなたちですけれども、これはあんまりです。お母様はどうも、思いついたことをただ言わずにはおられない方なのです。さすがにお父様に叱られることとなり、わたくしはヴィーナスにはならず済んだのでした。

そういうお母様は埃及の女王様になるそうで、お父様はナポレオンと仰っていましたから、これは大層ちぐはぐなことですけれども、仮装の宴なのですからかえつて楽しいのではないでしょうか。

今夜は、お父様が方々へお声掛けして下すつたので、たくさんの方が見えになると聞いています。わたくしがせんよりお会いした

くてたまらなかつた方を幾人も、お父様が御招待して下すつたのです。わたくしは楽しかったです。あまりません。

そんな躍るような心持の中に、一抹の不安が、インクの沁みのようにポツンと落ちておりました。

随分前から心に決めておりましたのに、やはりいざとなると足が竦むように思うのです。お父様もお母様も、驚かれることは間違いない、きつと悲しませることになりますでしょう。どうかするとただちに勘当さえ言い渡されかねないのです。

まりえは、親不孝な娘でした。

不安というインクの沁みは徐々に大きくなりつつあります。

それでも、舞踏会は楽しみには違いなく、わたくしの中には大きな喜びがあふれんばかり

りにあるのです。

このときはまだ、今夜起こる恐ろしい事件のことを、わたくしは知るよしもなかったのです。

2

「この街には探偵が必要……そうでござろう？」

男はそう言いながら、無精ひげをなでていた。

もう日も暮れたことだから、盛り場を流してみるかと思つていたところ、目黒の駅近くで乗つてきた男だ。袴姿だが書生というには臺が立っている。三十にはいかぬかもしれないが、二十五よりは若くはなからう。

「麻布の星乃邸へやつてくれ」

男は言った。

「あの星乃氏のお屋敷ですか」

「あのへんにほかにも星乃って家があるのかい」

「いえ」

運転手が問い返したのは、男がおよそ星乃家の客とは思われなかったからに違いあるまい。そこは客商売であるから、運転手はそれ以上は何も言わず、メーターを倒して、たそがれに染まる街を走り始めた。運転手はやけに体格の良い若者で、運転席に収まっているのが窮屈に見えるくらいだ。だがその逞しい肩が妙に縮こまって見えるのは、さきほど問い返したことで男が気を悪くしなかったろうかと気を揉んででもいるものか。

だとしても、運転手は責められない。なに

せ星乃家と言えば古くは華族だったのであり、大正の頃にゆえあつて爵位は返上することになったのだが、代々、トキオの要職を務めてきた名家中の名家である。すでに返上して久しいというのに、人々は星乃家のことをいまだに「星乃伯爵」と呼んだ。

そんな名家に赴くには、男はあまりにむさ苦しく、おおよそ星乃家と交わりがあるほどの社交界の住人とも思われない。そもそもそうであつたらタクシーなど拾わずに自家用車か、せめてハイヤーを呼ぶだろう。

あるいは、強請りたかりを生業とする破落戸が因縁をつけにゆくのではないか——そう思われても仕方のない風体だったのだ。

「知っておるか」

ふいに、男が口を開いた。

「はい？」

「星乃家は数々の偉人や傑物を輩出しておる」

さよう。

星乃家が名高いのは、その才覚の豊かさ、幅広さにある。才能というものが血筋で受け継がれるにせよ、その家の環境が影響するにせよ、蛙の子は蛙というもので、代々政治家の家もあれば、企業家の多い家、芸術家の血筋、というものがある。ところが星乃家は違った。星乃家の人々は、もつとも多いのは政治家ではあったが、同じくらいに企業家もあり、一方で芸術家も少なくない。医者としての世界的に有名になったものもいれば、学問で名をなしたものもいる。時計職人や料理人までする。鷹が鷹を産むというけれど、それでは言え、鷹が鳳凰を産み、その鳳凰が龍を産んだ。そんな家系なのである。

「ところが、でござるよ」

男は、そんな誰でも知っているような蘊蓄をもったいぶって語ったすえに、こう言った。

「そんな名家・星乃家から、今までただの一人も出ていない職があるのでござるよ。あんた、何だと思う？」

「……さあ、なんでしょうか」

「《探偵》、でござる」

「……」

運転手の沈黙を、おのれの談が与えた効果であると思い、満足げに男はにやつく。

「不思議ではござらんか。探偵こそ、このトキオのいちばんの花形。さよう——、この街には探偵が必要……そうでござろうか？」

「……」

「それなのに、星乃家出身の探偵は一人もおらぬでござるよ。警官や軍人はいるのでござる」

る。また、探偵を取材する記者もいれば、作家もいるでござる。しかし、探偵はおらぬ。まるで家訓で禁じられ、もしているようではござらんか」

「……お客さん、探偵なんですか？」

運転手が訊くと、男はぱつと顔をかがやかせた。

「オウ、バレてしまつては仕方がないでござるな。拙者は団子坂武蔵。目黒不動の近くで事務所を開いていゝでござるよ。失せ物、人探しから密室殺人まで、困つたことがあればいつでも相談に乗るでござる」

「探偵さんがどうしてまた星乃家のお屋敷に……オヤ」

運転手が声をあげたのは、この時刻にはいささかさみしくなる麻布の屋敷まちにさしかかり、いよいよ目指すお屋敷が見えたところ

で、いかめしいその門が大きく開かれ、次から次へと車が吸い込まれている様子を目にしたからだ。

「今夜はお屋敷でなにかあるのですね」

「いかにも。今宵は星乃家のご令嬢のお誕生日を祝して舞踏会が開かれるのでござるよ。ご令嬢はかの『鹿鳴館学園』の中等部に通つておいでだが、聞くとところで、探偵談には大層目がないということにござる。それで今夜はご令嬢のために大勢の探偵諸氏が招待されているそうであるが……いやはや、拙者も、万障繰り合わせて是非ご出席下さいとは言われたものの、可憐な乙女に『マア、探偵さん、貴方の冒険談をお聞かせいただけませんか？』などとねだられて話すうち、あにはからんや、恋の花の咲くようなことがあつては――」

「お客さん、着きました」

タクシーは、止まった。

男が金を払い（領収証も要求された）、そそくさと降りていったのを見届け、タクシーは邸宅のファザードからゆつくりと離れる。

バックミラーの中には、何台もの高級車とそこから降り立つ着飾った男女の群れ。

「一人も探偵を出していない名家、か」

ぼつり、と運転手はこぼした。

「探偵好きのご令嬢。誕生日の夜会。集まった探偵たち……。なにも事件が起きなければいいが」

だがそんな祈りにも似た思ひは、さも当然のように裏切られる。

それがトキオという街である。

3

「この街には、探偵が必要だ」

あの方はそう仰いました。

わたくしは、その意味を思い知らされることになったのでした。

その夜は、きらめく夢のような時間としてはじまりました。

わたくしは灰かぶり姫の美しいドレスに、すっかりのぼせあがつておりました。広間には賓客のために用意された料理が並び、かろやかな円舞曲が華やかな夜会のはじまりを告げています。

「永遠崎（とわざき）さま……！ 永遠崎サユリさまでいらつしやいますね！ まア、わたくし、わたくし……」

《女優探偵》（などという軽薄な二つ名はど

うかと思いますが通りがよいのでそう申しますけれど）として名高い、永遠崎サユリさまが、艶やかなイブニングドレスに、西洋のマスカレイドの仮面をお付けになってお姿をお見せになったときは、本当にこれは夢ではないかしらと思ったものでした。

女優として忙しくご活躍されながら、探偵としても一流の永遠崎さまは、わたくしの憧れであつたからです。

実際にお会いした永遠崎さまはそれはもうお美しく、女神のように神々しい空気をまとつておいででした。

「ご機嫌よう、ご令嬢。はじめてお目にかかりますわね。永遠崎サユリです」

「ええ、もちろん存じております。サユリさまのご活躍を書いた本はすべて読んでおりますし、ご出演の映画も……、まア、わたくし

つたら、サユリさまだなんて」

「いいのよ、そうお呼びになつて。お誕生日おめでとう」

その夜の舞踏会には、ほかに名だたる探偵の方々においでいただいていました。

今しがたいらっしゃつたタキシードの男性は「大東京探偵社」の中野太郎さまです。探偵法人のみなさんだけでなく、フリーランスの方も大勢いらしゃつています。

（この街には、探偵が必要だ）

かつて、あの方がそう仰つた。

そしてトキオにはたくさん探偵がいます。探偵試験の受験者数は年々増えているそうです。探偵法人への就職希望者も増えていると聞きました。探偵学部を設ける大学もあります。探偵の活躍を記した本が書店には並び、探偵の名がテレビで報じられない日はありません。

せん。

トキオほど、探偵を愛している街はないでしょう。

それは単に、怪人たちによる犯罪が絶えないからというだけでなく……どう申し上げればいいのでしょうか、まさしく、「この街が必要としている」からだといか言いようがない、そんな気がするのです。

——と、そのときでした。

わたくしは、お父様が慌てた様子で、お客様がたを掻き分けるように広間を横切って行かれるのを目にしました。

その日、わたくしが学校から帰って、今夜の支度をしているとき、お父様も早々にお帰りになったのですが、いつになく、そわそわとしておいででした。わたくしは、それはお父様も夜会のご準備にお忙しくされているの

だろうとは思わず、なにせ自分のことで頭がいっぱいでしたので、そのこと自体には気を割いていなかったのです。あのとき、わたくしがもつとよく気がついて、観察の目を働かせておりさえすれば……いえ、そんなことは申しても詮無いことです。

わたくしは、ナポレオンの仮装のお父様が、ただならぬご様子に見えましたので、オヤ、と目を引かれたのです。

永遠崎さまも、わたくしの視線を追ってお父様のほうをご覧になり……そして、まあ、と小さく声をおあげになりました。

「面白い仮装だこと」

永遠崎さまが仰ったのはお父様のことではありません。お父様が迎えられた——その方を迎えるために、お父様は広間の入り口へ急がれたようでした——その人物の異様な、え

え、異様としか申しようのない風体について
なでした。

今夜の趣向は仮装の舞踏会ですから、どんな
も趣き深いお衣裳です。ですが、夜会には
違いないのですから、やはり、人目について
不快を催す恰好は礼儀になつておりません。
その方は、薄汚れたトレンチコートを着て
おいででした。そして、つばの擦り切れたソ
フト帽をかぶり、その下には……わたくしは、
思わず息を吞みました。顔じゆうを、包帯で
ぐるぐる巻きにされていたのです。それはい
つか、西洋の恐怖映画で見た、甦った木乃伊
そのものでした。

お父様はその方と話をしておいでのように
でした。

何話をされているのかはむろん聞こえませ
ん。が、そのとき、お父様が数歩、よろめか

れたのです。なにかひどく心を乱されるよう
なことがあつたか、それとも突き飛ばされで
もしたのでしょうか。

わたくしは心配になりました。あの不気味
な仮装の方はなにものなのでしょう。

わたくしはお父様のもとへ行こうと、永遠
崎さまに、チョット失礼します、と告げて歩
き出しました。

「！」

突然のことです。広間の灯りが、ふいに、
消えたのです。

お客様のご歓談の音が、途切れます。もし
や停電……？と思つたときには、再び灯りが
ともりました。

ほっとしたような笑い声。ですが、わたく
しは、声をあげてしまいました。

「お父様！」

その声は思いのほか響き渡り——広間は、しん、と静まりかえります。その中を……ああ、まさしくそれは悪夢のように、わたくしは駆けていこうとするのに、ドレスとヒールでは思うように走れず……お父様はゆつくりと、床に崩れてゆかれるのでした。

わたくしがたどりつくよりも早く、近くにおられたどなたかが、お父様に駆け寄って下さいました。

その方が、正体をなくしたお父様のお体を仰向けにして下さり……

「た、たいへんだ……!」

と、声をおあげになりました。

傍で、心配そうに様子を見て下さっていたご婦人から、甲高い悲鳴があげました。

「し、死んでる!」

「殺されて——」

「ほ、星乃氏が!」

「殺人事件だあ!」

お父様の胸に……ナポレオンの軍服の、飾緒と勲章もきらびやかな胸のうえに、ナイフの柄が突き出しているのはつきりと見てとれました。じわりと、軍服の生地血が広がってゆくのも。

わたくしはお父様まであと3メートルというところで、凍りついたように立ち尽くしました。

混乱と狼狽、そして恐怖。華やかな夜会に沸いていた広間は一転、凄惨な殺人事件の場になりました。

わたくしは衝撃のあまり、哀しみさえにわかには感じられず、すべてのことがまるで他人事のように遠ざかっていくような心持に襲われていました。あるいは、なかば失神しか

かつていたのかもしれませんが。ですが、わたくしを踏みとどまらせたのは、ひとつの違和感であつたのです。

「……！ あの方は！」

そして、わたくしは気づきました。

「ここにいた方は何処へ？ お父様とお話されていた、お顔に包帯を巻かれた紳士です！」

わたくしは叫びました。

そう、あの怪紳士の姿がどこにもないのです。

周囲のひとからは、なにも応えはありませんでした。どなたもお気づきでなかったのかもしれないし、あるいはそれどころではない、ということだったのかもしれませんが。

わたくしは、すばやく周囲を見渡し、広間のどこにも紳士の姿がないことを確認しました。

（この街には、探偵が必要だ）

あの方の声が、はつきりと聞こえました。

ああ――。

そう、そうなのですね。これがわたくしの運命。

わたくしのなかで、覚悟という名のスイッチが入りました。

「みなさま！」

ありつたけの声を、わたくしはあげました。

「どうか――どうかご静粛に！」

狂騒に包まれていた広間は今いちど、静まりました。

人々の視線が、わたくしに注がれています。わたくしの鼓動は早鐘のように打ち、足は震えていました。けれど……わたくしは、広間の中央へ、人々の輪のなかへ歩み出しました。「わたくしは……星乃まりえです。父、星乃

敬一郎はたった今、なにものかの凶刃に倒れました。衆人環視のこの広間で刺されたのです。わたくしは……わたくしは……」

こんな場面を、何度も夢みていました。それがまさか、このような形で実現するなんて。

わたくしは深く息を吸い、そして、言いました。

「ご覧下さい。わたくしは……」

おお、と人々のあいだからざわめきが漏れました。

わたくしが差し伸べた、手の中に、シャンデリアの光を受けて燦然と輝くものこそ……《星のバッヂ》であつたからです。

「わたくしはこのほど、正式に《探偵試験》に合格し、トキオ市公認探偵の資格を得ました。従いまして、わたくしはすでに《探偵》

です。その星乃まりえの名において、この現場をわたくしの《探偵権》の管理下に置くことを宣言致します。トキオ探偵法に基づき、本件においてはわたくしが最優先の捜査権を有します。わたくしは……必ず、父を殺した犯人を見つけ出します。犯人は——」

わたくしは、広間にいる人々を見渡し、言いました。

「犯人は、この中にいるのですから！」

それが、わたくしの初めての《探偵宣言》であり、わたくしがあの方との約束どおり探偵としての道を歩き始めた、その第一歩だったので。

It's Show Time…!

「トキオ2.0」開幕によせて

二〇〇三年から、私、中田誠司は、シェアードワールド企画『探偵都市トキオ』を運営してきました。

サークル「Gate of Dragon」の仲間とともに、「大正九〇年代、トキオ市」という架空の世界を舞台に、名探偵が活躍し、怪人たちが跋扈する「レトロな探偵小説やジュブナイルの空気」をまとった小説作品を展開してきました。

その後、サークルメンバーの環境変化などもあり、事実上の休止状態になって、長く新作は生み出されていませんでしたが、ここに、「トキオ」のコンセプトを継承した新たな企画を、新たな形で立ち上げたいと考えます。それが「トキオ2.0」プロジェクトです。

「トキオ2.0」プロジェクトでは、「旧トキオ」（既存の『探偵都市トキオ』の世界観を便宜上、こう呼びます）の世界観とは異なる、新たな世界を構築します。そのうえで、新たなキャラクターによる、新たな物語が綴られていくことでしょう。「リメイク」というよりは、まったくの「リスタート」、新たな世界観の「リビルド」と考えてください。

世界観は、「古きよき探偵小説の世界」へのオマージュを目指した旧トキオの雰囲気に基づきしながらも、新たな要素や、現代的なアイデアを加え、「大正九〇年代、トキオ市」から「新昭和時代、トキオポリス」へ。レトロモダンな探偵小説の世界からレトロフューチャーな冒険活劇に生まれ変わります。

この小冊子は、そんな「新・トキオ」の雰囲気を紹介するために書き下ろしたものです。

今後、「永遠に完成しない未来への遺跡」《東京タワー》が見下ろす積層都市トキオポリスを舞台に、新たな探偵と怪人の物語が綴られていくことと思います。

形式的には、旧トキオが、あくまでもいち同人サークルによる小説作品群という、スタティクなものであったのに対し、「トキオ2.0」プロジェクトでは、そうした従来の創作だけでなく、より開かれた形での展開もしていきたいと考えています。具体的には「PBW（プレイバイウェブ）」や「TRPG（テーブルトークRPG）」化などのアイデアもあります。どうぞ「トキオ2.0」プロジェクトにご注目下さい。

なお、「大正九〇年代、トキオ市」を舞台に綴られた物語の「続き」が知りたいというお声も、当然、あるものと思います。「トキオ2.0」のはじまりが「旧トキ

オの終了」を意味するものではない、と私は思っているのですが、旧トキオの新作が出なくなってしまうのは、担い手の環境変化だけではない事情もあり、実際問題として新作をお届けするのが容易ではないため、そのような物言いは無責任かもしれません。

「トキオ2.0」はかつてのトキオとは似て非なるものですので、かつてのトキオを愛してくださった方すべてに、同じように愛していただけるとも思っています。ですが、今の私に言えるせいっぱいのことは「旧トキオの新作が永遠に出ないと決まったわけではない」ということと、「新トキオを、旧トキオの読者のみなさんにも楽しんでいただきたい」ということだけです。ご理解いただければ、さいわいです。

二〇一三年 八月吉日 中田誠司

TOKIO:2.0 PILOT 探偵宣言

発行日／2013 年 8 月 11 日

発 行／Gate of Dragon

連絡先／メール: info@nakata-seiji.net

Twitter: [@nakata_seiji](https://twitter.com/nakata_seiji)

企画・執筆／中田誠司

印刷／株式会社ポプルス

無断転載を禁止します